

で、新聞などにも折々見えるといふ話なんですが、
 又一方を見ますと、夜は寝ないで、こうやつて私
 所の車なんぞ引いて、お金を儲けてそれで書になる
 と御休みもなさらないで毎日學校に出て御稽古なさ
 るといふなんざあ、すばらしい剛氣な書生さんじゃ
 わりませんか。それで、どうか、こんな書生さんのお
 話を、ねー旦那、あの道樂書生さんたちに、聞か
 してやつたらと思つて居りますのでへえ」

今しも、彼が、親分的俠氣を以て、まさに、満腔の
 氣焰を吐き出さんとせる時、またく玄關に賀客の來
 訪せるありければ

「いや、どーも大變に長座を仕りまして……」
 なる一語を残し匆々にして立ち歸りぬ。

(完)

夜の梅

東くめ
 夜寒の風の
 吹み入りし、
 冬をつらさを
 忘れよと、
 ひまもりて、
 かよふなり、
 かをるまで。

母を戀ふ

さくら
 「父母より遠く遊ばず」の
 聖のをしゑ打とひき
 吾妻の空をこゝろざし
 出しは去年の夏なりき
 三百里外に母はわり
 去年の葉月の末つかた
 馴れし家をば立ち出で、
 又の旅寢のかりまくら
 孝養の日は終になし

三百里外に母はあり

旅から旅になれどろも

過ぎにし歳は六つ七つ

三百里外に母はあり

我が旅衣縫ふひまも

一とせ過ぎて歸る日を

三百里外に母はあり

學びのわざに日を暮し

母の情を縫ひこめし

三百里外に母はあり

身に置く霜を重ねつゝ

寄る年波に老ひ給ふ

くれくれ云ひし言の葉は

待たんとの外あらざりき

歸りてつゝる古布子

この手のあとぞ忍ばるゝ

この手のあとぞ忍ばるゝ

新しき學校

小林つね子

一、學びのまごの新しく
今朝わけそむる日のみ影

輝さわたる大君の
み恵仰ぐたよとさよ

二、磨き造しまなび屋に
さし入る月のかけ清く

満らひたる師の君の
み影につと嬉しさよ

三、天地静かに治まれる
御代の光をたどりつゝ

文の林にわざを積み
懸がてつくさん國の爲

花の木蔭

同人

いでや遊ばひまさかりの

花の木影にまどむして

囀ふ鳥の音聞ながら

思ふ友垣かい連れね

朝霞

中島歌子

のに山にたなひかれても行ものは

霞むわしたのこゝろなりけり